

86 きたやま 北山古墳

— 鳥取県最大の前方後円墳 —

所在地

東伯郡湯梨浜町野花・長和田

立地

東郷池の南西部に向かって突出するように伸びる北山丘陵の先端部に位置する。

時期

古墳時代中期前半

発見と調査

古墳の存在は古くから知られており、『因伯二国に於ける古墳の調査』でも全長43間余(77.4m)の前方後円墳として取り上げられた(文献3)。しかし、当時すでに後円部中央の竪穴式石室は大規模な盗掘を被っており、その残骸が残る程度であった。また、墳丘上の円筒埴輪の存在はよく知られており、採集資料が鳥取県立博物館、倉吉博物館などに収蔵されている。

戦後の1950年代には測量が行なわれ、全長110mの前方後円墳との認識に改められた(文献8)。また、1966年(昭和41)に山陰考古学研究所によって後円部埋葬施設の発掘調査が行なわれた(文献9)。

遺跡の種類

前方後円墳。国史跡(1980年(昭和55)6月3日)。

遺構と遺物

新たな測量結果から、全長110m、後円部径60m、高さ10m、くびれ部幅38m、前方部幅60m、高さ4.5mの前方後円墳と考えられる(図1)。県内最大の規模を誇る。後円部は、標高46～45m付近で緩傾斜になる場所があり、2段築成であることが比較的明瞭であるが、前方部は後世の改変のためか、段築成が明瞭でない。特に前方部の南側は不明瞭で、北側も前方部前端付近を除いてテラス面と呼ぶような平坦面は観察できない。

古墳は、東郷池や平野に開かれた北側を意識して築造されていると考えられ、その方向を中心にテラス面や埴輪列が廻るのかもしれない。少なくとも、後円部墳頂部平坦面に埴輪列が存在することは確実で、1966年(昭和41)の調査時に、円筒埴輪の基底部が並ぶ様子が観察されている。また、葺石が存在すると考えられる。

前方部頂部は後円部に匹敵するほど高く、前方部前端幅は後円部径とほぼ同じ長さをもつ。これらの形態的特徴は「中期的」であるが、周濠はなく、作り出しなどの付属施設は現状では認められない。ただし、後円部の竪穴式石室の調査の際に、石室の北側3mの地点に白砂を敷いた長さ3m、幅1.8mほどの空間があったと言い、鉄刀や形象埴輪片が見つかった。

竪穴式石室は、過去に徹底的な破壊を被っているため、基底部以外にほとんど残存していない。1966年に実施された発掘調査では、石室の基底部に敷かれた礫層と礫層上に残存した石室構成石材の一部、排水溝の一部しか明らかにならなかった。

基底部に敷かれた礫層の範囲は、長軸6.2m、短軸4.3mあるので、石室はこの範囲に収まるものであろう(図2)。また、竪穴式石室の天井石と思しき板状の石材が2点見つかっており、1点は長さ2.2m、幅1.25m、厚さ0.2mで、もう1点は長さ2.25m、幅1.0m、厚さ0.15mを測る。これらのことから、石室の規模を推測すると、長さ5m程度、幅1m程度と考えられる。石室の高さを推測する手がかりは乏しいが、幅と同様に1m程度であろうか。

石室基底部の西端部から排水溝が前方部の方向に続いている。排水溝の幅は30cm、深さは12cmあり、石室基底部に敷かれたのと同様の礫を充填した後に板石で蓋をしている。調査で検出された部分は3mほどであるが、全長は12mという。

発掘調査で回収された、本来竪穴式石室に副葬されたと考えられる遺物は、管玉1点、短甲片27点である(図3)。いずれも行方不明である。管玉は緑色凝灰岩製で長さ2.1cm、径5mmという。後述する箱式石棺出土の管玉とほぼ同様の位置付けが可能なものであろう。

短甲片は細片が多いため、型式を特定するに至らないが、実測図を見る限り、革組覆輪と考えられる部分や帯金の破片と思しきものがある。鉄板には綴穴と考えられる穿孔があるから、定型化した帯金式の革綴短甲と推測できる。明確に三角形を呈する部材がないことから、長方板革綴短甲であった可能性が考えられる。

竪穴式石室の南側で箱式石棺が1基見つかった。1966年(昭和41)の調査では、竪穴式石室とともに墓壇の存在に注意されておらず、遺構の前後関係を層位的に明示し難いが、竪穴式石室と基底部の高さが異なることを

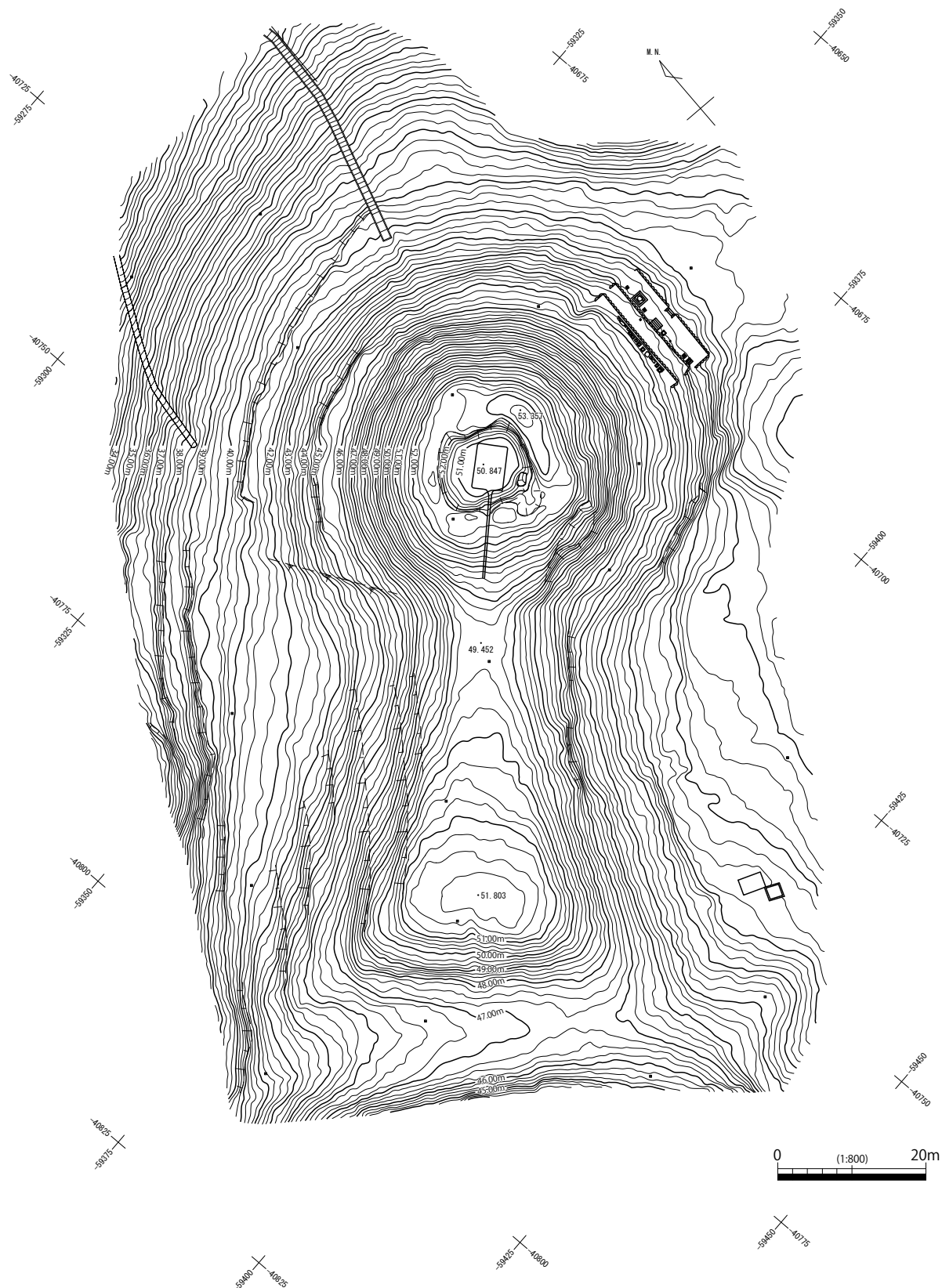


図1 北山古墳実測図

考えると、構築時期を異にする埋葬施設であり、竪穴式石室に後出すると考えられる。

長側板の間に小口板が挟まれるH字形で（文献10）、

内法の長さ1.55m、幅0.5m、高さ0.4mを測る。長側板は、北辺側、南辺側ともに2枚の板状石材を短辺側で継いで使用しており、継目の外側に別の板状石材を1、



図2 竪穴式石室の基底部 (1/100)

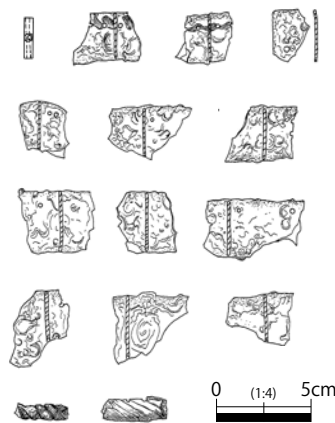


図3 竪穴式石室出土遺物 (1/4)

2枚補っている(図4)。棺内底面は、板石が敷き並べられた有底石タイプである。このような構造は畿内中枢域では主流の型式であるが、周辺部の北近畿や播磨などでは、非主流派であり、同一墳丘内に在地型式と混在しないため、集団差と考えられるという(文献10)。非主流派であるのは山陰地方でも同様であり、箱式石棺被葬者は、有底石タイプの箱式石棺を用いる他地域の人々となつたつながりをもった人物の可能性が考えられよう。

箱式石棺の遺物 竪穴式石室の南側で発見された箱式石棺は、未盗掘で現位置を保った副葬品が存在した。鏡

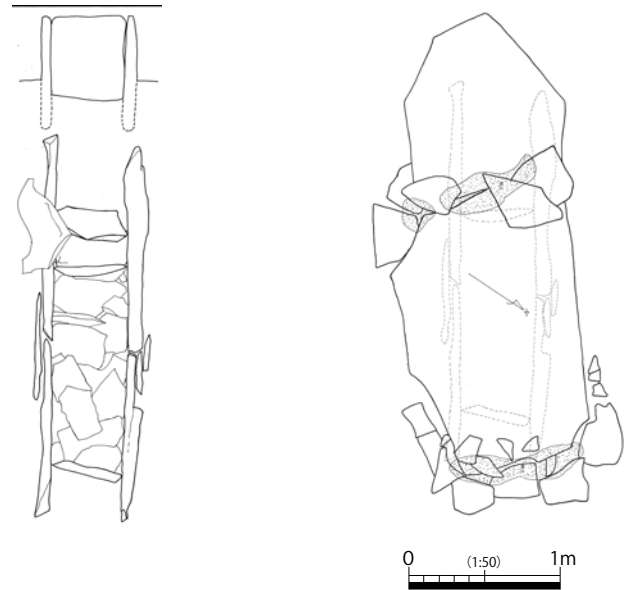


図4 箱式石棺 (1/50)

1点、鉄刀6本(直刀1、短刀5)、袋状鉄斧1点、鉄製柄付刀子1点、勾玉6点(翡翠製1、水晶製1、瑪瑙製4)、棗玉1点、碧玉製管玉67点である。

鏡は中国製の盤龍鏡で、径13.8cmを測る。角をもつ龍像(右)と向かい合う虎像(左)を表現し、龍像の下部に向かい合う鳥文を入れる。分厚い縁部で、内区外周に「尚方作鏡大毋傷 巧工刻之成文章 □□□□□□ □□□□□□□兮」の銘文がある(図5-8)。

岡村秀典によるIA式(漢鏡5期)、上野祥史による3B式に該当し、後漢前期(1世紀中頃)に製作された盤龍鏡の初期の事例に当たる(文献5、文献2)。これが300年以上後の古墳に副葬されていることとなる。

鉄刀は、直刀1本と、短刀5本がある。直刀は、全長73.7cm、刃部幅2.7cm、茎長11.7cmを測る(図5-1)。直角関で、茎尻も直線的なものである。目釘穴が2箇所あるが、鞘・柄ともに装具は存在せず、布が直接巻かれている。短刀は、全長が26.8cm~31.9cmのものである。すべて茎が7cm以下の短いタイプで、池淵俊一がB1類とするものである(文献1)。目釘穴が1箇所、茎尻に偏った位置にあけられている。また、いずれも装具はつけられていなかったようで、全面に布巻きの痕跡が残る。類例は、奈良県新沢500号墳(19本)、京都府園部垣内古墳(10本)、同鳥居前古墳(9本)から出土したものなど、前期末~中期初頭の古墳にあり多量副葬の傾向がある。北山古墳の石棺出土例も同様な性格を持ったものと考えられる。

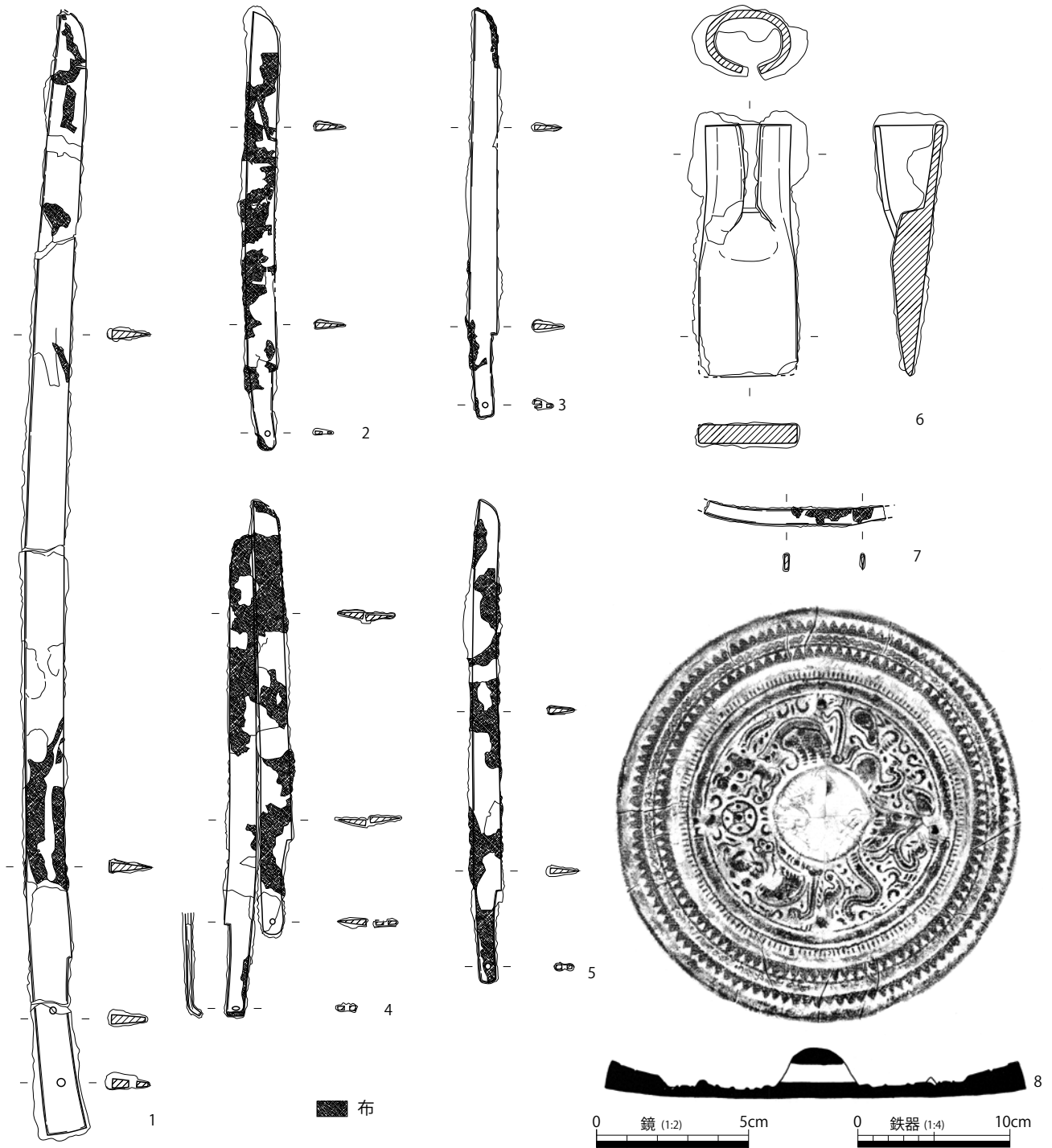


図5 箱式石棺の出土遺物 (1)

袋状鉄斧は、長さ17.6cm、袋部幅5.6cm、刃部最大幅6.4cmの大型品である(図5-6)。刃部の最も厚い部分は2.2cmあり、重厚な作りである。木製の柄が装着された痕跡はない。

従来不明鉄製品とされていたものは、鉄製の長い柄がついた刀子である(図5-7)。刃部、柄ともに端部を欠くが、長さ11.4cmあり、柄は9.6cm、刃部は2.2cmを残す。幅は約1cmある。残存する柄は緩く反り上がるので、端部が渦状になる蕨手刀子の可能性も考えられる。

布が附着するが、短刀に錆着していたためか、本来布巻きであったのかわからない。

勾玉は翡翠製1点、水晶製1点、瑪瑙製4点という前期後半以降に現れる出雲玉つくりの特徴的な組み合わせである(文献4、文献6)。翡翠製勾玉は、白斑のある灰緑色を呈し、丁字頭となる(図6-1)。全長3.9cmで、片面穿孔である。水晶製勾玉は全長4.7cm、両面穿孔である(図6-2)。瑪瑙製勾玉は、全長3.5cm~4.8cmで、よく研磨された断面が円形を呈するものである。内湾す

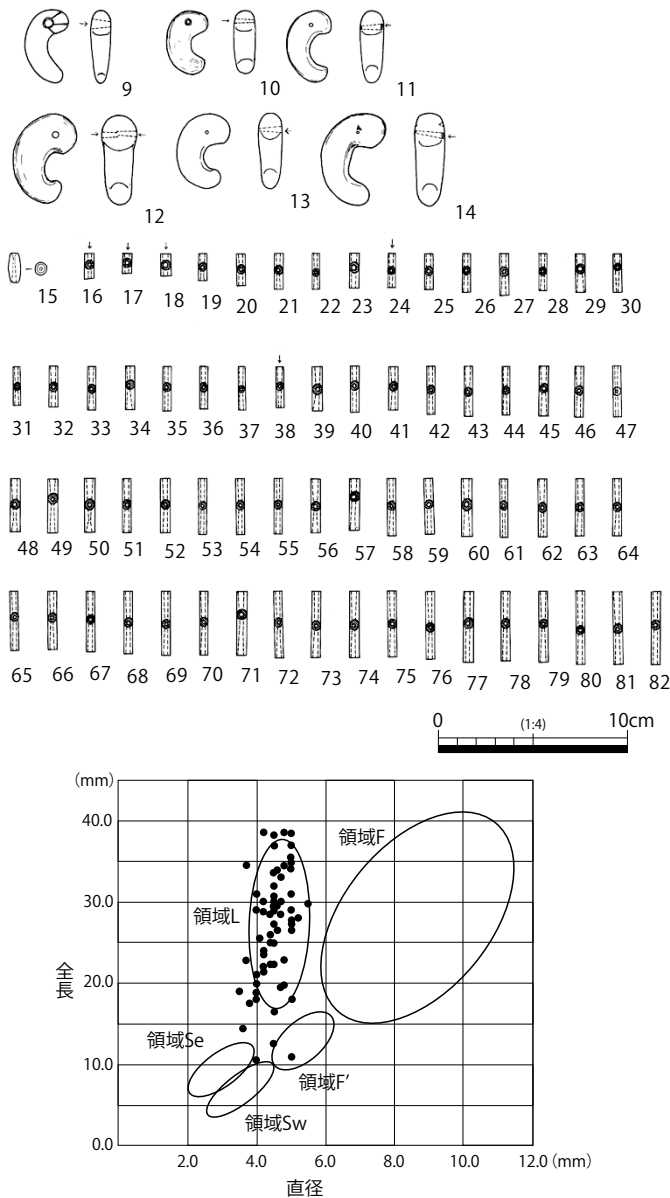


図6 箱式石棺出土の玉類と管玉の法量分布

る部分が角ばったやや古い段階の形状を示すものもあるが、C字形を呈するものが多い。

棗玉は蛇紋岩製と考えられ、長さ1.5cm、胴部最大径は6mmを測る。両面穿孔である。

管玉は、長さ10.5mm～38.6mm、径3.5mm～5.5mmの大きさで、緑色凝灰岩製だが、色調は濃緑色を呈するものから灰色のものまで多様である。法量は、前期末～中期前半に類例が集中する領域L（文献4）にほぼ重なる（図6-下）。

円筒埴輪が墳丘の全域から、形象埴輪が墳頂部ないし南くびれ部裾あたりから出土している。また、墳頂部の盗掘壕の排土からは笄形土器や円盤状土製品が見つかり、墳頂部における儀礼に使用されたものと考えら

れる。

円筒埴輪には、普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪がある（図7）。底部径の大きさで2種類、口縁部径の大きさに3種類程度に分けられると考えられる。朝顔形円筒埴輪は、壺の口縁部と肩部が見つかり、円筒部の径が30cm程度になる。同様なサイズの円筒部や底部が存在し、普通円筒よりも径が小さいと考えられる。

普通円筒埴輪は、全形を知りうるものが倉吉博物館所蔵品にあり、口径41cm、底部径29cm、高さ69cmで5段構成となる（図7-90）。口縁部は短く外反して折り返すものであるが、口縁端部外面に帯状の粘土を足して肥厚させるタイプも存在する（図7-91）。

スカシ穴は、倉吉博物館所蔵品は長方形で、2～4段目にあけるが、3段目は2、4段目と直交方向の異なる向きにあけている。しかし、主流は円形スカシと見られ、2段目と4段目にあけるものと思われる。外面の調整手法は、基本的にヨコハケを基調とし、B種ヨコハケを用いるものがある（文献13）。ただし、大型品はタテハケを基調としているようである。黒斑があり、表面に赤色塗彩したものがある。

形象埴輪は、盾形埴輪、甲冑形埴輪が認められ、動物埴輪として鶏形埴輪がある。また、土製円盤、笄形土器の他に、文献9には竹管文を施す特殊な土器の図も掲載している。

盾形埴輪は、破片数が最も多く、同一個体と考えられる21片で長さ119cm、幅55cmの大きさのものが復元された（図8-114～120）。革製盾を模倣したもので、外周に鋸歯文、内側の区画に多重の菱形文を配する。別個体と考えられた破片も、同様な文様構成をとるようだ。

甲冑形埴輪は、革綴短甲の各部分を表現した破片がある（図8-103～113）。革組覆輪を施す後胴押付板と見られる破片の他、前胴堅上部と考えられる破片、引合板と裾板を表現した破片があり、帯金式革綴短甲を表現すると考えられる。

付属具として鋸歯文を多重に刻んだ草摺^{くさすり}を表現するものがあり、短甲と草摺がセットになった、高橋克壽が1類とするものを考える。短甲部と草摺部が分離されるタイプであるか、一連に作られたタイプであるか、明らかにし難いが、文献9では後者が考えられている。

ただし、鋲^{しころ}と考えられた破片については、再検討が必

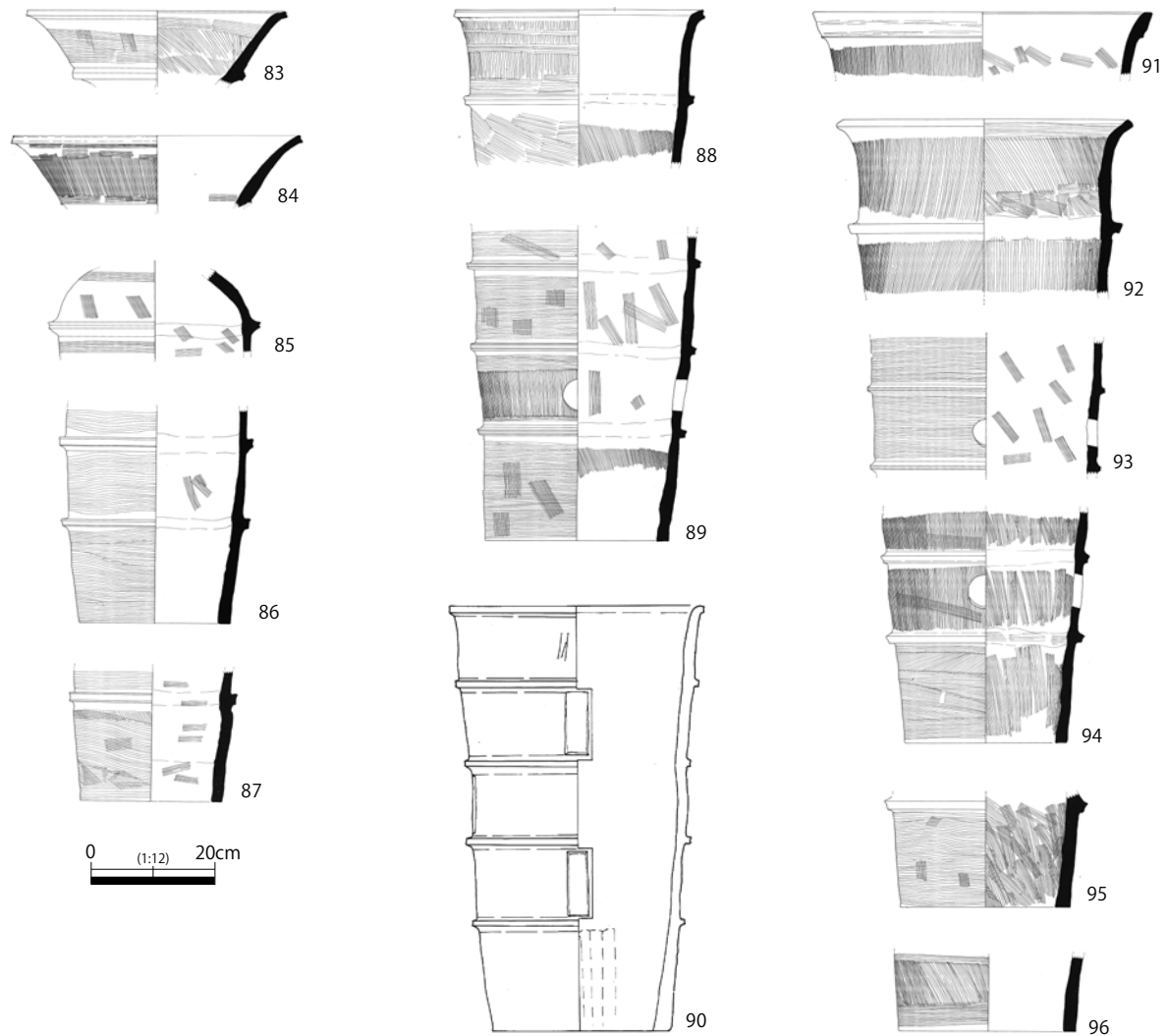


図7 円筒埴輪

要と考えられる。その理由は、鋳の破片であれば、冑と一連に作成される甲冑形埴輪2類を想定することになるが、1類と盛行時期がずれることがまず挙げられる。また、鋳とすれば、複数の線刻を表現するので、多段式の板状鋳を模倣したと考えるが、帯金式革綴短甲とセットになる段階の鋳は、1枚鋳と考えられるから（文献14）、鋳だけ著しく新しい様相を呈することになる。別の器種を検討すべきであろう。

鶏形埴輪は、鶏冠が大きく発達した雄と小さな雌を作り分けていると考えられる（図8-101、102）。雄の方は、円形の粘土板を貼り付けて耳羽も表現する写実的なものである。また雌雄とも首筋から背にかけて羽の線刻表現がある。頭部の大きさは、くちばしから後頭部まで長さ10cm程度と小型ながら、足なども立体に表現することから、中期中葉以前の古い段階に置くことができる（文献7）。

後円部墳頂から採集された土製円盤は、径4～7cm、厚さは1～2cmで、文様から内行花文鏡を表現していると考えられる（図8-97、98）。特殊な土器は、壺とも考えるがよくわからない。2点のうち1点は無文だが、1点は竹管文を密に施し、弥生時代終末期～古墳時代初頭に見られる特殊な器台形土器や壺形土器を連想させるが、それらとの関係の有無はわからない。

また、同様に墳頂で採集される土器に椀形土器、^{ざる}笊形土器がある。椀形土器は、口径10.3cm、高さ4.0cmで、外面を赤色塗彩する。口縁部内面付近を細かくヘラケズリする（図9-121）。笊形土器は、口径11.6cm、12.0cm、高さは完形品で3.8cmあり、内外面に幅1.5mmほどの材料で編まれた笊を押し当てて圧痕文をつける。外面には赤色顔料がつく（図9-122、123）。

笊形土器は、墳頂部や作り出しなどの施設で、魚や果物などの食物を模した土製品が盛られたと考えられる事

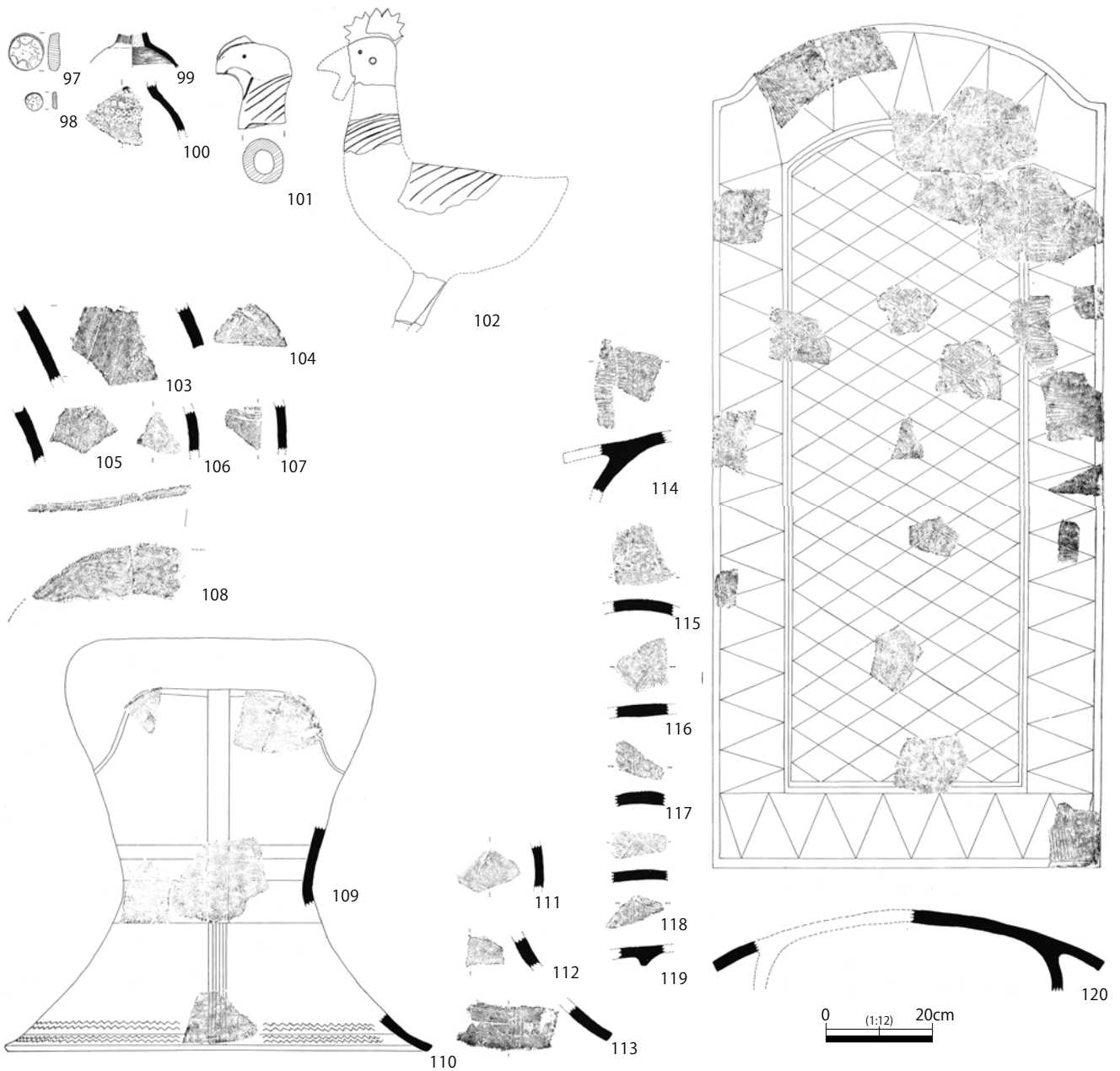


図8 形象埴輪

例もあることから、実際の食物を供献する儀礼が仮託されたものと考えられる。類例は、古墳時代前期末～中期前葉における畿内中枢の大王墓級の前方後円墳から見つ

かるほか、同時期の地域を代表する有力な前方後円墳からも出土する（文献12）。北山古墳被葬者は、それら有力古墳の被葬者と同じ葬送儀礼を共有する関係にあった人物と考えられよう。

特徴と意義

主要埋葬施設が破壊されて

ほとんど情報がないことは残念であるが、第2埋葬施設の副葬品と埴輪の組み合わせは、中期前半の大型古墳の内容を伝える点で貴重である。墳丘や埴輪配列に関する情報が乏しいので、基礎的な調査が実施されれば、なお一層の重要性が明らかになる。

現状と遺物

墳丘は史跡に指定され、保存されている。遺物のうち、竪穴式石室出土品は行方不明となっているが、箱式石棺出土品は、山陰考古学研究所から米子市を経て倉吉博物館に寄贈され、円筒埴輪の一部などと共に保管されている。ただし、形象埴輪も所在不明である。

文献

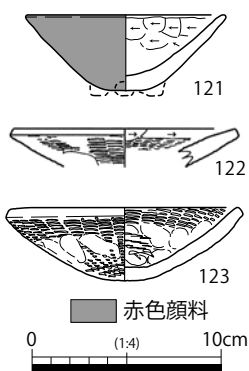


図9 墳頂部表採の土器

1. 池淵俊一 2019「武器からみた伯耆国分寺古墳の年代」『伯耆国分寺古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・伯耆国分寺古墳研究会 pp. 53-60
2. 上野祥史 2003「盤龍鏡の諸系列」『国立歴史民俗博物館研究報告』第100集 pp. 1-20
3. 梅原末治 1924『因伯二國に於ける古墳の調査』鳥取縣史蹟勝地調査報告第二冊 鳥取縣
4. 大賀克彦 2013「①玉類」『副葬品の形式と編年』古墳時代の考古学4 同成社 pp. 147-159
5. 岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集 pp. 39-83
6. 河村好光 1992「攻玉技術の革新と出雲玉づくり」『島根考古学会誌』第9集 pp. 15-30
7. 忽那敬三 2001「鶏形埴輪の変遷と性格」『考古学研究』第48巻第3号 pp. 106-124 考古学研究会
8. 佐々木古代文化研究室 1959「鳥取県前方後円墳地名表(3)」『ひすい』68
9. 山陰考古学研究所 1978『山陰の前期古墳文化の研究 I - 東伯耆 I・東郷池周辺 -』山陰考古学研究所記録第2
10. 清家章 2001「畿内周辺における箱形石棺の形式と集団」『古代学研究』152 pp. 1-18
11. 高橋克壽 1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号 pp. 69-104
12. 東方仁史 2010「笄形土器研究ノート」『遠古登攀 遠山昭登君追悼考古学論集』 pp. 41-51
13. 東方仁史・君嶋俊行・岩垣命・中原斉 2017「東郷池周辺大型前方後円墳の埴輪」『調査研究紀要』8、鳥取県埋蔵文化財センター pp. 71-86
14. 古谷毅 1988「京都府久津川車塚古墳出土の甲冑 - いわゆる“一枚鍔”が提起する問題 -」『MUSEUM』No. 445 東京国立博物館 pp. 4-17

(高田 健一)